

死者の漕ぐ船: コールリッジの「老水夫の歌」と太平洋航海

石倉和佳

1. はじめに

ロマン主義文学で太平洋(Pacific Ocean)を舞台とした物語を描いた代表作といえば S. T. コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)の「老水夫の歌」(初版 1798 年、最終版 1834 年)がある。バラッド・スタンザで書かれたロマン主義期の代表的作品であり、ウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)との共著、『リリカル・バラッズ』初版(*Lyrical Ballads*, 1798)の巻頭を飾った。この詩は一人の水夫の嵐による遭難とその後の超自然的な体験が主軸となったものであり、その物語を老人となった水夫が道行く婚礼の客に語るという枠構造を持ったものである。老水夫の語る物語を海洋冒険譚として見ると、奇妙に思える特徴がある。主人公は一介の水夫であり船長やそれに準ずる船の先導者が一切登場しないこと、詩に描かれた船は一度も大海の中の島や南極や南アメリカの陸地に近接もしくは上陸しないことである。嵐に流された船は氷で覆われた海域へと進むが、主人公の水夫がアホウドリ(albatross)を殺すという出来事のあと、船は異なる海域へと運ばれる。幽霊船、船員の大量死、発光する海洋生物の群生など、物語は様々な航海記に描かれた海の事象とともに展開し、主人公以外の乗組員がすべて死に絶えたあと、精霊の登場と死者による船の航行により最後には故郷へと向かうという展開になる¹。詩の中盤から後半にかけて前面に出てくるのがプラトニズムの世界観である²。その文脈においては、後半の部分は、高次の世界に住む一つの魂としての精霊が、複数の精霊の声となって言い交わしながら船を進ませる、と読める。

20 世紀になると、英文学研究が高等教育の中で制度化し、コールリッジはロマン主義期の重要な詩人、思想家として位置付けられ、「老水夫の歌」は彼の代表作として論じられるようになった。この詩の解釈は様々に行われてきたが、一つの型として、「老水夫の歌」全体に見られる象徴的表現を重視し、罪と贖罪の物語として読み解くものがある。この場合物語の枠構造や主人公の虚構性が重視され、嵐で流される水

夫の姿は普遍的人間の姿として読み解かれる。詩における想像力の働きを重視するこの読解は、I. A. リチャーズ (1893-1979) による『コールリッジの想像力論』(Coleridge on Imagination, 1st. ed. 1934) によって開かれた、文学の作家研究を文学理論研究へと発展させる軌道の上で成立したものである。これとは別に、作者コールリッジの体験や彼自身の心的傾向との関連を重要視する方向がある。こうした読解は老水夫を作者の投影と見て、この詩が彼の人生を予言的に描いているものと見る視点も与えている。また、アホウドリを殺したことの動機が描かれていないことから、これを作者の原罪意識の投影と見る見方や、年老いてもなお放浪しながら人々に語り続ける老水夫の姿に、生涯に何度も居場所を変える一所不在の趣のあるコールリッジの人生を重ね合わせることもできる³。

先にも述べたように、船長の不在は「老水夫の歌」を特徴づける重要な点であると考えられるが、象徴性を重視する読解においては、老水夫を通して描かれる人間の苦悩や希望への希求は、船長を頂点とした社会的ハイレアルキー構造の中での出来事として描かれているのではなく、あくまでも主人公個人の意識のドラマとして提示されていると解釈される。別な見方として、1794 年頃に計画されたパンティソクラシー (Pantisocracy; 一切権力平等団) というアメリカ移住計画に熱中し共産的社会を夢見ていたコールリッジの描く船に、船長がいらないことは作者の思想と合致すると考えることもできないではない⁴。ただし船長の不在について様々な解釈が可能だとしても、この点に関する可能な読解の全てが、これまでに論じ尽くされたわけではない。当時のイギリスは海運国家として世界に覇権を広げようとしていたが、その時代に書かれた詩において、船長など船のリーダーや、その指示のもと協力していく人々の姿さえほとんど描写にないことに、若干の違和感が残るのも確かなのである。超自然的現象を多く描きこんだこの詩の特徴は、読者に様々な読解の可能性を与えているが、それが必ずしも罪の意識と贖罪を求める心というキリスト教的倫理に沿った読解でなければならないというわけでもないはずである。

上記を踏まえて、本論はこの詩を太平洋表象との関係から検討するものである。この考察に先立ち、英文学史上ロマン主義期と言われる 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、太平洋とは何であったかについてまず考えてみたい。

2. ロマン主義期の太平洋—ジェイムズ・クック太平洋探検とバウンティ号の反乱

18世紀後半から19世紀初頭にかけての太平洋に関する情報で一般に流布したものといえば、ジェイムズ・クックによる（James Cook, 1728-1779）3度の太平洋航海と、同行したイギリス海軍の士官たちのその後の活躍が中心となる。当時すでに太平洋航海を取り扱った書籍はいくつも刊行されていたが、イギリス海軍による調査の航海誌は、乗組員の記録をすべて参照して編纂されており、情報としての信頼性が高いものである。クックの3度の太平洋航海も、その後「バウンティ号の反乱」(Mutiny on the Bounty)として有名になるウィリアム・ブライ(William Bligh, 1754-1817)海尉による太平洋航海も、イギリス海軍が何らかの形で監修した航海誌が出版されている。

イギリス海軍による太平洋航海は、表向きは科学的調査とされることが多かった。地球上の未踏の地の地理的情報をどこの国よりも早く正確に把握することは、領土に関する政治的な意味合いにおいて重要なことであったが、それと同時に航海術の向上と地理情報の把握の精度向上の努力を行うことが、海洋大国を目指すイギリスが必要としたことも事実であった。その努力の成果は、まず王立協会主導による科学調査や資源探索を名目とした太平洋探検の形を取って人々に知らされることになったのである。クックの第1回航海は、太平洋南部に広がると考えられた広大な大陸、テラ・オーストラリス(Terra Australis)が存在するかを探索するものであり、ニュージーランドとオーストラリア東岸の地理が明らかになった。第2回航海でクックはさらに太平洋の南方を南極圏に接するまで探索し、イースター島、トンガ、ニューヘブリデスなどを確認するとともに、長らく信じられてきたテラ・オーストラリスは、南半球を覆うようには存在せず、オーストラリアの東には島々が点在する地域が続くことが明らかになった。そしてこの航海ではそれまで計測が難しかった経度の測定を最新式のクロノメーターを使って正確に行い、船舶の位置特定の精度を格段に上げることとなった。第3回航海はクック船長がタヒチから連れ帰ったオマイ(Omai, c.1751-c.1779)を帰国させることが一つの目的とされたが、重要な点としてアメリカ大陸北西部から東に抜ける北西航路の探索があった。

クックの航海では、船内の清潔維持やビタミンの摂取などが慣行され壊血病で死ぬ船員はほぼいなくなり、測量術と航海術の発達により難破や破船で航行不能になることも減っていた。科学的知識や技術の進歩がこうした結果をもたらしたと言えるが、

18 世紀後半のイギリス海軍の活動は、しかし必ずしも明快で合理的な印象を与えるものではない。このことは、ロマン主義期の文学にクック航海やそれに準ずるテーマが全面に取り上げられることがほとんどないことと関係しているようにも見える。1779 年、クック船長はハワイ島の原住民たちとの騒乱の中で殺され、残された隊員たちは持ち去られた遺体の返還に何日も費やした後、やり残した北西航路探検に出発した。クックを継いだチャールズ・クラーク (Charles Clerke, 1741-1779) 船長が船隊の指揮を執ったが、帰路についた後、ベーリング海からカムチャッカへ向かう途中で死去している。1788 年にはアンドリュー・キップス (Andrew Kippis, 1725-1795) によるクックの伝記が刊行された⁵。この伝記の内容の多くの部分はそれまでに公開された航海誌からの抜粋や関係者の様々な逸話で構成されている。伝記の終盤では、クックの死を招いた騒乱の場面を、クック隊の船医でありその場に居合わせたデイヴィッド・サムウェル (David Samwell, 1751-1798) の筆に語らせ、ドキュメンタリー調の展開となっており、その結末がクックの死とともに終わるところなどは、悲劇のカタルシスの効果さえ感じさせるものとなっている。クックの死は 20 世紀以降もヨーロッパ文明を体現する人物と「未開」の人々との間に起こった象徴的な事件としてさまざまに論じられてきたが、同時代の人々にとってはクックを取り巻く物語がどのようなフィクションよりも深く心に刻まれるものであったことは想像に難くない。クックの物語は地理の教材や偉人伝の一つとして、19 世紀初頭にはすでに子供向けの読み物として流布していた⁶。クックを偉人として語る言説は 20 世紀に至るまで繰り返されることになるが、彼の調査隊の成果はその後の伝染病の蔓延や太平洋の島々の変質とともに賛否両論取り交ぜた評価が行われることになる。

他に人々の記憶に残った海軍関係の事件としては、前述した 1789 年 4 月 28 日に起こったバウンティ号の反乱がある。クックの第 3 回航海において、航海士として活躍したブライ海尉は、バウンティ号に乗り太平洋にむかった。王立協会の肝いりでプランテーションでの労働者(奴隷)の食料として期待されていたパンノキ (breadfruits) の苗の収集をするためである。彼はまずタヒチをめざし、しばらく滞在したあと西進したが、その途上バウンティ号は船員の一人フレッチャー・クリスチャン (Fletcher Christian, 1764-c.1793) 率いる乗組員達に乗っ取られた。バウンティ号から放逐され小舟に寄せられたブライたちは 6 千キロも太平洋を西へ航行してティモールまでた

どり着いた。クックの物語と違って、この話は船の上での権力闘争と太平洋でのサバイバルが物語的には興味深い要素であり、ブライ船長以下 18 人の乗組員は無事であったことから、悲劇というよりも主に冒険譚としてとらえることができる。

クックの死とバウンティ号の反乱に共通するところは、船長の立場として皆を率いるはずの人物がある時点で死や排斥によって不在となり、そのことがそれらの事件を物語として語る際に重要な要素となる点である。先にも指摘した「老水夫の歌」の船長の不在と、これらの同時代の事件の印象は何かしきオーバーラップする。それでは「老水夫の歌」は、同時代における海洋探検の物語とどのような位置関係にあると捉えればよいのだろうか。次には、「老水夫の歌」(初版)の同時代批評を取り上げ、イギリスにおける太平洋に関する認識とともに検討したい。

3. 「老水夫の歌」(1798 年初版)の『ナヴァル・クロニクル』における書評

「老水夫の歌」の初版の書評には辛辣なものが多く現れた。「とても奇妙なでたらめの物語」「理解不能や野蛮さと支離滅裂のラプソディ」(“a strange story of a cock and a bull,” “a rhapsody of unintelligible wildness and incoherence,” reviewed by Charles Burney, Jackson, 56)と書くものもあれば、コールリッジの友人のロバート・サウジー(Robert Southey, 1774-1843)は「ドイツの崇高さを狙った下らない試み」(“a Dutch attempt at German sublimity,” Jackson 53)とこき下ろした⁷。ワーズワスもこの詩を再版された第 2 版で「多くの欠点がある」(“The Poem of my Friend has indeed great defects...”)と述べ、欠点を列挙して批判する始末であった⁸。確かにこの詩の初版は後に何度も改変された版に比べて野趣に過ぎる箇所が散見し、1817 年の版から登場する詩の注釈となる詩行の横に付けられたグロス(gloss)もないため、読みにくいと思われたとしてもある程度理解できなくもない。歴史的に見れば、「老水夫の歌」が書評家からの評価を受けるのは 1820 年代になってからであり、また彼の代表作としての評価が確立するのは、もっと後の 20 世紀になってからなのである⁹。

しかし、出版当時の書評が、すべて否定的なものであったわけではない。海軍関係の雑誌であった『ナヴァル・クロニクル』(*The Naval Chronicle*)の書評は、「老水夫の歌」(1798)に非常に高い評価を与えている。この書評は、コールリッジの作品の書評として知られることが少なく、これまでほとんど考察されてこなかった¹⁰。海軍士官の

伝記や話題を中心として取り上げるこの雑誌は、20 世紀以降の英文学研究では違う分野のものとして深く考察されることがほとんどなかったようである。しかしこの書評はこの詩を航海の文学として明確に位置付けたもので、同時代における太平洋航海を念頭におくと、「要旨」(“The Argument”)の部分全文引用しているところなど、他の書評誌の評者とは異なる視点をもってこの詩を捉えていることが分かる。

「老水夫の歌」は 7 つのバラッドから成っており、古い時代の詩人の形式と精神を踏襲して書かれている。[詩の冒頭に置かれた]要旨は次の通りである。

いかに船が赤道を通り嵐によって流され南極に向かって寒い地方へと流されたか、そしていかに船がああの大太平洋の赤道付近まで航行したか。そして奇妙な出来事が降りかかり、いかに老水夫が彼の故郷に帰りついたか。

正確な観察をする人にとって、迷信は多かれ少なかれ我々の性質の中に沁み込んでいるのだと分かるだろう。それは信仰深い心に生える雑草なのだ。澄み渡った理性の光の前では枯れ果てるに違いないものだとしても、我々の超自然的なものへの偏愛はとても大きく、どのようなものでも驚くべきものへ心を向けることは即座に受け入れられおおらかに推奨される。

The Rime of the Ancyent Marinere, which consists of seven ballads, is written in the Style, as well as in the Spirit, of our early poets.—The argument is as follows:

“How a ship having passed The Line was driven by Storms to the cold Country towards the South Pole; and how thence she made her course to the tropical Latitude of The Great Pacific Ocean; and of the strange things that befell; and in what manner The Ancyent Marinere came back to his own Country.”

To an accurate observer, Superstition will generally be seen more or less prevalent in our character: it is the Weed of a religious Mind; and though it must ever wither before the clear light of reason, yet so great is our predilection [prediction] for supernatural agency, that whatever has a tendency to the marvelous is readily received and liberally encouraged. (*The Naval Chronicle*, 328)

この評者は、航路がどのように描かれているかに注目しており、同時に超自然的な現

象について寛容である。コールリッジが書いた「要旨」が引用されているが、大西洋を南に下り南極圏まで行った後、太平洋の熱帯地域まで航行したとしている。これは古くはフランシス・ドレイク (Francis Drake, c.1543-1596) がマゼランに続いて太平洋一周航海を行った時にとった航路と同様のものである。ドレイクはアメリカ大陸南端にあるマゼラン海峡を通過し太平洋に出て、現在のカリフォルニア州に上陸し一帯の領有を宣言したといわれる。後述するシェルボック (George Shelvocke, 1675-1742) もアメリカ大陸最南端を回り、クックは第1回の世界一周航海でこれと同様の航路を取った。

『ナヴァル・クロニクル』はジェイムズ・クラーク (James Stanier Clark, 1765-1834) によって 1799 年に創刊されたもので、コールリッジの詩が取り上げられたのは第2号である。他の書評誌に倣ってか、この時期は海軍関係でない作者の詩なども取り上げていた。興味深いのはこの詩の作者についての言及である。編者は序文で、「ケンブリッジからの便りでは、『老水夫の歌』の作者は疑いなくジーザス・カレッジのコールリッジ氏 (“Mr. Coleridge of Jesus College”) ということだ」、と述べている (vi)。そして書評の中ではコールリッジを『リリカル・バラッズ』の唯一の作者と考え、この作者はイギリスの詩人の中で第一級に位置づけられる、とまで賞賛している¹¹。ケンブリッジに入学したころのコールリッジは、ギリシャ語のオードで賞 (“The Browne Medal for Classical Composition”) を取り、彼の寮の部屋には侃々諤々の議論をするために多くの学生が出入りしていた¹²。そのようなコールリッジをよく記憶している人物と、同じくケンブリッジ大学で学んだクラークとの接点があったことも想像しうる。ケンブリッジで才気煥発にふるまっていたコールリッジのイメージが、「老水夫の歌」(1798) の評価と結びついているのかもしれない。実際はコールリッジは 1791 年にケンブリッジ大学に入学したが、1795 年には学位をとることなく学籍抹消されており、その後ユニテリアン (Unitarian) としての活動をしばらく行ったあと、この書評が出た頃にはワーズワスとドイツに渡っていた。

『ナヴァル・クロニクル』の書評は「私たちは特に海事関係の人々に[この詩の]全体をよく読むことを推奨したい。このような作品が現れるのであれば、読者も詩的天才の枯渇を嘆く必要はないからである」¹³と語る。『リリカル・バラッズ』が再版までこぎつけたのには初版の売れ行きが悪くなかったことが影響している。この詩集の売り上げについて、コールリッジは次のような話を残している。

ロングマンが言うには、『リリカル・バラッズ』の大半は、船乗りの人々に売られたということだ。彼らは「老水夫」のことを聞き、それは海の歌謡集、もしくはいずれにしても海に関係するものだと考えたのだ。

I was told by Longmans that the greater part of the Lyrical Ballads had been sold to seafaring men, who having heard of the Ancient Mariner, concluded that it was a naval song-book, or at all events, that it has some relation to nautical matters. (After 21, September, 1821; *Table Talk*, vol2., 375) ¹⁴

出版業者のロングマンは、第2版以降の出版を引き受けたところである。ここに書かれているような書籍の売れ方は、『ナヴァル・クロニクル』に掲載された高評価の書評が何等か影響している可能性もある。船や航海に関係する人々の読者層と「老水夫の歌」についての関係は、これまでほとんど取り上げられていないと思われるが、1799年の『ナヴァル・クロニクル』には「航海文学」(naval literature)「航海詩」(naval poetry)などの見出しが付いて多くの旅行記や海に関する詩が紹介されている。海事関係、特にイギリス海軍の人々にとって、航海記や旅行記の類は、その海域に臨むときには読まねばならないものであった。そして教養としての詩作品の読書も推奨されると考えられたのだろう。19世紀を迎えたころのイギリスにおいて、海と文学は、海運が国家的事業として発展する中で、現在想像するよりもはるかに緊密な関係で捉えられていた。

以上、「老水夫の歌」について、同時代における太平洋の物語、および書評の面から考察してきた。『ナヴァル・クロニクル』の書評から分かるように、海洋関係の文学を取り扱う人々の目から見て、この作品は航路といい超自然の取り扱いといい、大海を渡り貿易や調査、または海戦に向かう人々にとって理解できる範囲にあると思われると考えてよいだろう。コールリッジが「老水夫の歌」を書いた時点では船旅の経験がなかったことを考えると、このような詩を書いたことは不思議にも思われる。一般的にこの詩は、身近な人々との会話や種々の航海記の内容がヒントになり、本人の想像力によって作り上げられたと考えられてきた。次にはコールリッジが太平洋航海について、どのように関心を抱き、「老水夫の歌」を書くに至ったかについて見ていきたい。

4. 「老水夫の歌」への道—ウィリアム・ウェールズとフレッチャー・クリスチャン

「老水夫の歌」を執筆する以前に、実際に太平洋航海を体験しコールリッジが何らかの影響を受けた人物といえ、クックの第2回航海に金星観測のために同行したウィリアム・ウェールズ(William Wales, c.1734-1798)を挙げなければならない。彼はクライスツ・ホスピタル(Christ's Hospital)に在学した最後の2年間、すなわち1789年秋から1791年春まで、数学科においてウェールズから直接数学を習った。コールリッジはグリーシアン(Grecian)、今でいえば文系の特進クラスにいたが、ウェールズの講義はケンブリッジ大学に入学が決まった生徒たちが受けるものであった。ウェールズは数学科の主任教授であり、学生の多くは地形の測量や緯度経度の計測を数学的基礎から学びイギリス海軍に進んだ。海洋体験が豊富で当時の船舶に必要な最新の測量の知識があったウェールズの指導は厳しかったと言われているが、一方で温和な風貌でヨークシャーなまりで学生を笑わせる人物でもあった¹⁵。コールリッジが18歳の生徒であったとき、クック航海に同行した海のベテランである50代半ばの数学の教官がどのように映ったのかははっきりとは分からない。コールリッジがウェールズとの個人的な交流について記したものは筆者の知る限り残っておらず、兄ジョージ(George Coleridge)にあてた1791年3月の書簡には、数学クラスについて、ユークリッド幾何学の解説を政治的関心と共に風刺した詩が書かれている¹⁶。

このように、コールリッジとウェールズの関係はこれまである程度論じられてきたが、その具体的内容については同時代史料がほとんど残されていない中では推測の域を出ない。しかしコールリッジの友人のチャールズ・ラム(Charles Lamb, 1775-1834)が書き残したように、ウェールズは当時のクライスツ・ホスピタルの名物教官であり、数学者としても尊敬されていた。クックの第2回航海に金星観測のため同行した数学者の存在によって、生徒同士の会話の中でも様々な海洋の話題が出たであろうし、クライスツ・ホスピタルの生徒たちの空気を何等か色づけていただろう。少なくとも言えることは、コールリッジはイギリス海軍の任務についたベテランと触れ合う機会を得たということであり、すでにこの時期にクックの旅行記やその他海洋探検の話題に親しんでいたことは確かだろうと考えられる。

「老水夫の歌」で決定的な出来事となるのは、主人公の水夫がアホウドリを殺す行為である。船を追尾するアホウドリの話は太平洋航海では珍しくなく、しばしばシェル

ボックの航海記(*A Voyage Round the World by Way of the Great South Sea*, 1726)が「老水夫の歌」の制作にインスピレーションを与えたとされるが、クックの世界一周航海の記録にも様々に登場する。シェルボックの船はブラジル沖から南へと押し流され、マゼラン海峡を行き過ぎてアルゼンチンの南端、ティエラ・デル・フエゴ(Tierra del Fuego)の付近まで来た。寒さで乗組員が凍り付いて溺れ死ぬことさえあった。その時まで何日も、黒いアホウドリが船へと飛来してきていた。その鳥は「気を失ったかのよう到我々の周りを舞っていた」(“hovering about us as if he had lost himself.” 73; October 1, 1712)という。船員の一人はこの鳥が黒い色をしていることもあり、凶兆(“ill omen,” 73)と考え撃ち殺したが、そのあとも嵐は止まなかった¹⁷。クックの第2回航海誌にも、アホウドリが多数飛来し、乗組員たちは時には射落としてその肉を食べる様子が報告されている¹⁸。ウェールズは南極圏に近づいた船をアホウドリを含む多数の鳥たちが取り囲んだ状況を何度も経験し、船がさらに南下したあともついてくるアホウドリの小さな群れがいたことも知っていたと考えられる¹⁹。コールリッジの身近には、彼が後年「老水夫の歌」で描いた、氷に囲まれた海を行く中で、アホウドリが船を追い飛来した情景を実体験した人がいたわけである²⁰。

大洋を航海する水夫たちの間には多くの迷信が伝えられていた。アホウドリにも超自然的な存在とする解釈がまわりついている。羽を伸ばした体長が2メートル以上にもなる巨大な鳥であるアホウドリは、飛行継続能力が高くほとんど翼を動かさず空を舞ってられる。前述したように、そうした様子をシェルボックは「気を失ったかのよう」と表現しているが、古くからの迷信ではアホウドリは死んだ水夫の魂を抱いて飛んでいると考えられた²¹。死んだ人の魂を抱いて飛ぶ鳥という伝承は、「老水夫の歌」の中ではプラトニズムの思想と親和性があるように見えるが、後述するようにこの詩に登場する精霊は亡霊となった死者の魂ではないとされる。一般的に航海中に鳥の飛行を見かけた場合近くに島や陸地があると考えられるが、アホウドリの場合は長距離の飛行が可能であり必ずしもそうではない。ほかの鳥が全く近寄らなくなっても、食べ物求めて数羽だけ追っかけているということは珍しいことではない。しかし羽を広げたままで空中を浮遊するように追尾する鳥の姿に、水夫たちが何等か人知を超えたものを感じたとしてもおかしくはない。こうした鳥を殺すことに禁忌が生まれるのは、命の危険と隣り合わせの限界状況での航海においては、超自然なものを崇拝する心

性が働くからとも考えられる。

次に、コールリッジがクライスツ・ホスピタルの数学クラスにいた時期に話題になった事件として、前述したバウンティ号の反乱を考えたい。反乱によりバウンティ号からイギリス海軍の船員たちが放逐され、ボートに乗せられて大海に置き去りにされたということは、ブライ船長がイギリスに帰国するまでにすでに知られており、彼が翌年1790年3月にロンドンに戻った時には喝采をもって迎えられたとも伝わる。この事件への関心は高く、1790年に発行された記事には、首謀者がクリスチャンであることなど事の顛末を詳しく報道するものがあつた²²。同年、ブライはバウンティ号の損失に対する責任を免除され、彼の航海誌 (*A Narrative of the Mutiny*, 1790) が出版された。この時期まではこの事件に対する世間的な関心はブライ船長への賛辞に傾いていたが、1794年、フレッチャー・クリスチャンの兄で法律家のエドワード (Edward Christian, 1758-1823) がブライ船長の航海中の横暴な態度を告発し、反乱はブライ船長の非にあるという主張をポーツマスで行われたバウンティ号の反乱者の軍事裁判記録の補遺として出版すると、この事件への世間の関心の潮目が変わつた²³。ブライ船長は暴力的な船長として印象付けられ、フレッチャー・クリスチャンは反乱の首謀者として罪に問われる立場でありながら、専制を敷く船長から自らを解放したという文脈でも語りうるようになったのである。

これらの出来事にコールリッジがどの程度興味を示したか実際は分からない。しかし注目すべきは、1795年から翌年の間に書かれたノートブックにある執筆計画のリストの中に、次のように書きつけていることである。「クリスチャンの冒険、反乱者」(“Adventures of CHRISTIAN, the mutineer—”, *CN*, I, 174) ²⁴ これがフレッチャー・クリスチャンを指すのは明白であり、コールリッジはこの時期までに何らかの太平洋を舞台とした物語の制作を考えていたことになる。このことに加えて、当時知り合ったウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1750) がフレッチャー・クリスチャンと同郷であつたという事実が、現在まで様々な憶測を呼ぶことになった。ワーズワスの生まれ故郷である湖水地方のコッカーマス (Cockermouth) は、クリスチャンの故郷のすぐ近くであり、クリスチャンとワーズワスが通つたのは、同じグラマー・スクールのホークスヘ

ッド・スクール (Hawkshead School) であった。また、兄のエドワードがワーズワス家の弁護士であった時期があり、エドワードが書いたブライ船長への告発文の中には捕縛された反乱者への尋問の立会人としてワーズワスの縁者の名が挙げられている²⁵。

1796 年 8 月にクリスチャンの書簡を含むバウンティ号の反乱者たちのその後を描いた書籍が出版されたが、書評誌も兄のエドワードも、この本が虚偽であることを明言した²⁶。この書籍をコールリッジが知っていたかどうか分らないが、このような偽書の出版は、フレッチャー・クリスチャンを物語の主人公として取り上げることの価値を削ぐものだったといえる。クリスチャンが海軍の資産を略奪し、海軍士官たちを命の危険に曝した一連の事件は、その後のクリスチャンの消息への詮索と共に長くイギリスで語られることになる²⁷。

1797 年、コールリッジがイギリス南西部、サマセット州ネザー・ストーウェイ (Nether Stowey, Somerset) の村に住むようになり、近隣に住むことになったワーズワスとの交流が深まる中、同年 11 月に「老水夫の歌」は書き始められた。コールリッジが「老水夫の歌」を制作するにあたって、バウンティ号の反乱、特にフレッチャー・クリスチャンの人物像がどの程度影響したかについては分からない²⁸。不思議なことにこの詩に関する記録として残っているものは、コールリッジが書き残したものよりも、はるかにワーズワスの方が多い印象がある。その印象は特に、ワーズワスの談話をイザベラ・フェンウィック (Isabella Fenwick, 1783-1856) が 1843 年に口述筆記したフェンウィック・ノート (Fenwick Note) にあるコメントが、現在でも多くの版に収録されていることによって強められている。この中でワーズワスは、「老水夫の歌」が最初はコールリッジとの共作として計画されたと語っており、自分はシェルボックの航海記を読んでいたもので、太平洋に入っていく際に一羽のアホウドリを撃ち、その地の守護霊が殺した罪に対して復讐に来ることを示唆したという。そして死んだ水夫が船を漕ぐことも自分が示唆したと語っている²⁹。しかしこうしたワーズワスの説明は半世紀近く経ってから記録されたものであり、その実この詩の要点となることを述べているにすぎず、コールリッジがワーズワスの説明に十分呼応するような記録を残していないためどこまで正確かはわからない。実際はコールリッジが

太平洋の物語に関する多くの詩のアイデアをすでに持っており、ワーズワスをはじめとする友人たちからの刺激をうけてそれらの断片的なアイデアが一つの詩作品へと集約された、と考えるのが自然であるように見える。

「老水夫の歌」の成立の背景には、コールリッジがウェールズから直接的、また間接的な刺激をうけて知り得た太平洋航海についての知識が関係していることは十分に考えられる。また、フレッチャー・クリスチャンについて、当時多くの報告が出版されていたため、コールリッジも反乱の後日談やクリスチャンの消息について興味は持っていただろう。コールリッジは「老水夫の歌」において船長もおらず陸地にも上陸しない放浪する船を描いたが、それがクリスチャンの反乱の罪を背負った逃避行とは異なるものへと展開していったのは、ワーズワスと出会い、ネザー・ストウウェイで過ごす間に、クリスチャンを英雄視する心性が別なものへと変化したからではないか。コールリッジが実際の航海にヒントを得た海の物語から、自然の表象と祈りと精霊の交錯するドラマへと詩の世界を昇華させていくとき、そこには肉体から精霊へとつながる魂のありようを定置させるプラトニズムの思想があった。次には「老水夫の歌」におけるプラトニズムについて若干の考察を行いたい。

5. 死者の漕ぐ船—プラトニズムと精霊が宿る大海

先にも述べたように「老水夫の歌」の中盤から後半にかけては、プラトニズムの影響を強く受けた部分が続く。コールリッジがプロティノス (Plotinus, c.204/205-270) やその他ネオプラトニズムの思想家たちに影響を受けたのは、かなり若い時期からであり、クライスツ・ホスピタルの時代から熱心に読んでいたと言われている³⁰。ネオプラトニズムの思想家への関心はその後も失われることなく、1795年以降、ラルフ・カドワース (Ralph Cudworth, 1617-1688) の著作を読みさらに古代から近世にかけてのヨーロッパにおける神学と哲学に対する造詣を深めた³¹。「老水夫の歌」を広くプラトニズムの文脈において見れば、詩の修辞的な面に影響が現れている、というよりある種のプラトニズム的世界観が船の物語の進行に対して機能しているという点が特徴といえる。水夫がアホウドリを射殺するという行為の後、霊的な力が現れ、その力が船と船員たちの運

命に作用していくのであるが、霊的な力はつぎのように登場する。

About, about, in reel and rout	あたりは一面にゆらめく暴徒のように
The Death-fires danc'd at night;	死の炎が夜に踊った
The water, like a witch's oils,	海はあたかも魔女の香油のように
Burnt green and blue and white.	緑と青と白に輝き燃えた ³²

And some in dreams assured were	夢で確かに見たというのは
Of the Spirit that plagued us so;	精霊が我らをこのように苦しめること
Nine fathom deep he had follow's us	9 フアゾム深く彼は我らを追う
From the Land of Mist and Snow.	霧と雪の陸地から

(1798, 1st edition, ll.123-130)³³

この場面に続いて幽霊船が現れ、その後船員たちは次々と死ぬ。老水夫は「孤児の呪いは地獄まで／高みから来る精霊よ／しかし、ああそれよりも恐ろしいのは／死んだ男の目に宿る呪い」(“An orphan's curse would drag to Hell/ A spirit from on high: But O! more horrible than that/ Is the curse in a dead man's eye!” ll.249-252) と語るが、船は死んだ水夫たちが操り先へと進んでいくのである。

コールリッジは「老水夫の歌」を何度か改訂しているが、1817年の版はグロスが付いたことで詩の構造が一段と複雑になった。老水夫が婚礼の客に物語を語っている時点は、老水夫のかつての航海の時点よりも新しい。しかしそうした出来事がバラッドという詩の形になったのは、老水夫の語りの時点より後である。それらが中世の設定だとして、グロスの語りは詩の語りとは様態が変わっている。グロスの語る内容はバラッドのものよりも説明的であり、中世後期の知識人の語りの様態を示している。先に引用した霊的な力が初めて登場する箇所、1817年の版では次のようにグロスがついた。

精霊が彼らを追った。この惑星に住む見えないものの一つで、亡霊でもなく、天使でもない。これらについては碩学のユダヤ人ヨセフスやコンスタ

ンティノーブルのプラトン学者マイケル・プセルロスを参照されたし。それらは数限りなく、一つもしくはそれ以上が存在しない地域も領域もない。A spirit had followed them; one of the invisible inhabitants of this planet, neither departed souls nor angels; concerning whom the learned Jew, Josephus, and the Platonic Constantinopolitan, Michael Psellus, may be consulted. They are very numerous, and there is no climate or element without one or more. (1.131 のあと)

ここで言及されているヨセフス (Flavius Josephus, c.AD 37-c.AD 100) はイエス・キリストの一世代後に生まれた歴史家であり、新約聖書に描かれているイエスの生涯の歴史的側面を理解するのに不可欠な記録を残した。プセルロス (Michael Psellus, 1018-1078) はビザンチンのギリシャ人の歴史家であり哲学者であった。コールリッジはカドワースが取り上げたようなネオプラトニストの思想家にはここでは言及せず、プラトニズムが様々に変形し受容されていく歴史の中の一側面を伝える歴史家たちを選んでいく。

ヨセフスの『ユダヤ戦記』(*The Wars of the Jews*, c.75-80) には魂の不滅を信じる人々のことが言及されているが、彼が残したユダヤ人の一派、エッセネ派 (Essenes) についての記述は、「老水夫の歌」の場面を理解する一つの助けになると思われる³⁴。

魂は最も微細な空気から出て、自然な誘惑に惹かれて牢屋に入るように人の体に結ばれる。しかし肉体の枷から自由になる時、長い束縛から解放され、喜んで上方へと昇っていく。そしてギリシャの人々が言うように、良い魂は海の向こうに住処を持ち、そこでは雨嵐や雪や厳しい暑さに苛まれることなく、止むことなく海から吹いてくる柔かな西風で生気を得る。悪い魂は暗く荒れ狂う洞窟で、止むことの無い罰をうけている。

[T]hey[souls] come out of the most subtile air, and are united to their bodies as in prisons, into which they are drawn by a certain natural enticement ; but ... when they are set free from the bonds of the flesh, they then, as released from a long bondage, rejoice and mount upward. And this is like the opinion of the Greeks, that

good souls have their habitations beyond the ocean, in a region that is neither oppressed with storms of rain, or snow, or with intense heat, but that this place is such as is refreshed by the gentle breathing of a west wind, that is perpetually blowing from the ocean; while they allot to bad souls a dark and tempestuous den, full of never- ceasing punishments. (Josephus, *The Works*, 617)

ここに書かれた肉体と生命に関する考え方を当てはめれば、「老水夫の歌」において船員がすべて死に絶えた時、肉体から解き放たれた魂は大海の上空で天へと向かっているか、荒れ狂う海上で苦しんでいるはずである。そうした二極化する魂の形は、「老水夫の歌」では言い交わす精霊の声に照射されたものとして描かれていると考えることもできる。難破して南極圏まで下り、その後太平洋へと突入する航海の物語は、詩に登場する精霊の働きに連れられるかのように、次々に不可思議な情景を展開する。詩の記述は精霊と死んだ水夫たちの魂との関係を明らかにしないが、見えないものの力によって船が帰路へと向かうとき、『ナヴァル・クロニクル』の筆者が人々の持つ「超自然的なものの偏愛」を指摘しているように、この詩は人間の意志よりも大きな見えない何ものかによって人間が動かされるということを語るものとなる。

魂の不滅への希求と永遠の罰をうける苦悩との間で、人々が長い歴史を刻んで来たとすれば、紀元 3 世紀に花開いたプロティノスを中心とするネオプラトニズムの潮流はイエス・キリストを信じる人々にも何らかの影響を与えずにはいなかっただろう。「老水夫の歌」には、迷信を信じる水夫たちの群像や、祈ろうとして声がでない水夫の姿が描かれ、死んで肉体だけになった水夫たちが何等かの霊がとりついたように船を操り始める。この詩において信仰の形は明確な形態をとらない。恐怖と苦悩によって無意識に祈るのである。作者コールリッジがプロティノスの説く「流出」を大気に満ちる精霊との関連としてイメージし、海洋の不可思議な光景を想起するとき、「老水夫の歌」の世界は輪郭を得たと言える³⁵。

喜望峰沖の海洋の表面が一斉に光る光景を、クック第 2 回航海の公式航海誌は次のように伝えた。

[夜]8時から9時の間、一面の海は、視界の届く限り、あたかも一斉に光で照らされた。もしくは、船乗りたちの呼び方によれば、一面の炎だった。

Between eight and nine o'clock, the whole sea, within the compass of our sight, became at once, as it were, illuminated; or, what the seamen call, all on fire.

(Cook, *A Voyage towards the South Pole*, 15) ³⁶

先に見たようにコールリッジは「死の炎が夜に踊った」(“The Death-fires danc’d at night”)と書いたが、詩の進行の中で夜の海と火のイメージは、海中深く追う復讐を求める精霊のイメージと融合している。ロマン主義期における太平洋を舞台とした作品の中で、おそらく最も重要なものの一つである「老水夫の歌」は18世紀後半までの種々の太平洋航海誌に描かれた海洋の不可思議な現象をイメージの源とし、ヨーロッパ思想を紀元前から彩ったプラトニズムの思想を援用し、バラッドというブリテン島から北方にかけて残された口承文学の詩形を採用して作り上げられた。船長の不在は超自然的な出来事の強烈なイメージによって見えなくなっている印象であるが、1817年の版からつけられたトマス・バーネット (Thomas Burnet, c.1635-1715) からのエピグラフ (epigraph) にある、「この世界には見えるものよりも見えないもののほうがはるかに多いことを確信することはたやすい」(“I can easily believe, that there are more Invisible than Visible Beings in the Universe.”)という言葉が、船長が語ることが多い航海誌の定石を考へはしない詩なのだ、と暗示しているともとれる³⁷。

(本稿はJSPS 科研費 21K00366 の助成によるものである。)

¹ ここで述べた詩の展開は、1798年の初版のものであり、物語を説明するグロスが付いた1817年版とは若干ことになっている。初版では、精霊が水夫たちを苦しめる夢を見る者が船にいと詩の本文で述べられているが、それ以上の船の難破などに関する原因に直接的に言及する事項は述べられていない。

² コールリッジは特に Plotinus を中心とした「ネオプラトニスト」と呼ばれる思想家たちには強い関心を抱いていたが、後述するように、1817 年のグロスにおいてはプラトニズムの歴史的展開に目を向けている。英語圏における Neoplatonist/ Neoplatonism の概念の提示、および語の最も早い使用例はコールリッジに見られ、それらがヨーロッパ思想の歴史的展開の文脈で使用されていることから、ネオプラトニズムという名称はコールリッジにとっては史的理解の指標と考えられる。Lectures 1818-1819, 1, 161, 192 参照。どちらも 1819 年の 1 月のコールリッジの講演ノートにある。Kabitoglou 特に 11 および 27 を参照のこと。

³ 「老水夫の歌」の象徴性を重視する読解は Warren の “A Poem of Pure Imagination” (1947) によって拓かれたと言ってよいが、翌年に Whalley が “The Mariner and the Albatross” (1948) においてこの詩を作者の人生の寓話としての読解の可能性を述べた。同時期に出されたこの二つの読解は必ずしも象徴主義と伝記重視にそれぞれ偏ったものではないが、その後の数え切れない「老水夫の歌」研究における読解の方向性を分ける初期のものとなった。その他重要なものとして コールリッジの度重なる詩の改変を相対化し独自のテキスト編集を試みた Empson による一連の論考 (1964, 1972 および 1993)、また 1980 年代以降では McGann, *The Beauty of Inflections* がこの詩の時間構造を詳細に分析している。Stillinger, *Coleridge and Textual Instability* は、20 世紀末のディコンストラクションの批評上の潮流に対してアプローチする形となったものである。

⁴ パンティソクラシーはコールリッジの造語で、個人の所有権をなくしすべての人々の財産と権利を平等にするというコミュニティ計画の名称である。何組かの男女がアメリカに移住し開拓村を作る予定であった。

⁵ Kippis は非国教徒の聖職者であり多くの著述を残している。彼のクック伝は、イギリス海軍が刊行した公式航海誌に多くを準拠しているとはいえ、その構成と語りにおいて 18 世紀の伝記文学の伝統を継ぎ発展させた面があると考えられるが、ほとんど独立した研究がなされていない。おそらく、クック航海誌の現代の編者である Beaglehole が、Kippis のクック伝の 18 世紀英文学との接続を考慮せず、全く評価しなかったことが影響している。Beaglehole 参照。

⁶ クックを教材に使った最も早いものの一つに、R. Turner による地理の本がある。この本は中等教育を受ける学生向けに編集された。青少年向けの書籍に取り上げられたクックについての概要は、McMahon 参照。

⁷ Jackson, 56 および 53 参照。サウジーの書評の引用にある “Dutch” は、侮蔑的な意味で使われているため「下らない」と訳している。

⁸ *Lyrical Ballads* (1963), 276-277 参照。第一の欠点として、主人公が超自然的な現象を信じる人間であったといった性格付けがされていないこと、彼自身が行動するのではなく、何かに行動させられていること、物語展開に必然性が低いこと、イメージが必要以上に積み上げられていることなどをあげている。こうしたワーズワスの「老水夫の歌」批判の妥当性についてはさらに検討しうものだろう。

⁹ 同時代におけるコールリッジの詩の評価に好意的なものが現れるのは、J. G. Lockhart が *Blackwood's Edinburgh Magazine* に書いたコールリッジの詩作品を取り上げたエッセイ以降と考えられる。Jackson, *Coleridge: The Critical Heritage*, 436-453 参照。

¹⁰ Jackson, 参照。2000 年代以降、google books など多くのロマン主義期時代の書籍や書評雑誌が公開されるようになり、現在では『ナヴァル・クロニクル』にアクセスすることも容易である。

但し、ロマン主義期のテキストが整備されていった 20 世紀後半までの時代、各地の図書館に収められている図書を網羅的にチェックすることは非常に困難だった。海軍関係の研究資料について、英文学領域ではないという理解が一般的であったこともあり、関連を調べることはこれまででも少なかったと推測できる。

11 “We trust the author will ere long gratify the public with his name, since he promises to rank amongst the first of our poets.”(*Naval Chronicle*, 328) 海洋関係の雑誌に掲載されたため、形式的な賞賛と読む傾向もあるかもしれないが、著者の知る限り、同時代書評のなかで「老水夫の歌」と作者に対する最大の賛辞ともいえるものである。

12 このギリシャ語の詩はオード形式で書かれており、奴隷貿易反対の立場から奴隷として使役される人々に歌いかけたものである。タイトルの英語訳は“The unhappy fate of the slaves in the West Indian Islands”である。本文と背景については、*PW*, 1, part1, 72-84 参照。また、ケンブリッジの学生時代のコールリッジについては、Charles Valentine Le Grice, “College Reminiscences of Mr. Coleridge,” *Gentleman’s Magazine*, 1834, 605-606. 参照。

13 “[W]e particularly recommend the perusal of the whole to our Professional Correspondents, who must not complain of a dearth of Poetic Genius, when such compositions appear.”(*Naval Chronicle*, vi) 詩的天才の枯渇を嘆く必要はないと述べるこの筆者は、18 世紀末のイギリスにおいて詩の凋落が話題になっていることに意識的である。

14 このコールリッジの発言は、これまでほとんど取り上げられなかったことである。コールリッジの若い友人、トマス・オールソップ(Thomas Allsop, 1795-1880)が出版したコールリッジの談話集に収録されているものであるが、この談話集は編集の過程が明らかにされていないことから総じて重要性の低いものとして取り扱われてきた。このような同時代資料をどのように取り扱うかは難しい問題であるが、本論の場合のように、他の資料と併せて考察することが出来るものも多い。

15 クライスツ・ホスピタルは 16 世紀から続く中等教育機関である。慈善学校(charity school)として設立され現在に至る。17 世紀には数学科(Royal Mathematical School)が作られた。当時のクライスツ・ホスピタルの様子については、Johnson に、ラムやコールリッジ、そしてリー・ハント(Leigh Hunt)の回想がある。

16 31 March, 1791 To George Coleridge: *CL*, I, 7-9 参照。コールリッジは後年数学を学ばなかったことを後悔していたが、自分が習った教官としてウェールズをあげ、彼がクックの世界一周航海に同行した旨を述べている(“the famous Mathematician, WALES, the companion of Cook in his circumnavigation” *CM*, I, 615)。Colley は、コールリッジにおけるユークリッド幾何学の重要性を説き、彼が地形や地理、風景を把握する際の原理となっているという視点から考察している。*Colley, Coleridge and the Geometric Idiom* 参照。

17 Shelvocke, 72-73 参照。

18 “Mr. Forster shot some albatrosses and other birds, on which we feasted the next day, and found them exceedingly good.” Cook(1777), vol.1, p.13. (23, Oct. 1772). これは公式記録として公刊されたものに記載されているものである。クック自身が記録していた日誌には、“Little Wind with some Calms, in the am[sic] hoisted out a Boat and shott[sic] Albatrosses and other Birds on which we feasted the next day.”(Cook, ed. Beaglehole, vol1, 44) とある。

19 “Mr. Forster shot an albatross, whose plumage was of a colour between brown and dark gray, the

head and upper side of the wings rather inclining to black, and it had white eye-brows. We began to see these birds about the time of our first falling in with the ice islands; and some had accompanied us ever since. These, and the dark-brown sort with a yellow bill, were the only albatrosses that had not now forsaken us.” Cook(1777), vol. 1, 38. この時船は氷が浮かぶ海域へと入り込んで、水の補給のためにボートを出して水桶に氷を積み込んだ。その時にも黒いアホウドリが飛来していた。クックの記録には次のようにある。“Some of the Seamen call them Quaker Birds, from their grave Colour. These and a Black one with a yellow Bill are our only Companions of the Albatross kind, all the other sorts have quite left us.” Cook, ed. Beaglehole, vol.1, 76.

²⁰ 「老水夫の歌」とクック第2回航海については、Lowes が詩に描かれた内容との関連においては最も詳しい。Smith の論考は *Collected Coleridge* などコールリッジ関係のテキストが十分でない時代のものであるが、ウェールズの航海日誌などの関連資料をよく検討している。ウェールズについては、Griffin-Short, Wales などの論考がある。

²¹ クックと同行したジョージ・フォスター(George Forster, 1754-1794) の航海記には、アホウドリが死んだ水夫の魂を持って飛んでいる、という迷信を語る者がいたことが記録されている。“Some of our sailors, who had formerly sailed on board of East India ships, after comparing the facility of those voyages to the hardships of the present, propagated the ludicrous idea among their messmates, that these birds contained the departed souls of old India captains; who now, exiled to a part of the ocean which they shunned before, were forced to gather a precarious subsistence instead of enjoying their former affluence, and were made the sport of storms which they had never felt in their cabbins.” (Forster, 1: 234)

²² *Gentleman's and London Magazine*, “Remarkable Events for the Year 1790, March 14,” 5; *European Magazine and London Review*, “Miraculous Escape of Captain Bligh,” 236-7; *Political Magazine*, “Authentic Account of the Mutiny on board the Bounty Armed Ship,” 195-6.をそれぞれ参照のこと。

²³ Barney 参照。この記録を纏めた Barney は、反乱者の一人である William Muspratt の弁護人であった。14 頁に渡るエドワード・クリスチャンによる補遺は、この反乱の真の原因を広く知らしめるため、として書かれている(60)。

²⁴ コールリッジのノートブックの当該箇所への注には、編者 Kathleen Coburn が長文のコメントを載せている。Coburn は、「老水夫の歌」のアイデアには、1797 年時点のクリスチャン、すなわち太平洋をさまよう逃亡者のイメージとともに、大海の中、小舟に投げ出されたブライ船長の人物像も関与しようと述べている。CN, I, 174n 参照。

²⁵ Barney および MacGillivray 参照。コールリッジとワーズワスが初めて会った 1795 年の夏からコールリッジがノートに「クリスチャンの冒険、反乱者」の物語のアイデアを書きつけた 1796 年の間、二人はほとんど直接会うことはなかった。この物語のアイデアはワーズワスとは直接関係ないものと推測しうが、確定的ではない。

²⁶ *Letters from Mr. Fletcher Christian* である。Monthly Review, October 1796, 233 参照。

²⁷ クリスチャンは反乱の後イギリス海軍の探索が始まる中、タヒチよりさらに東の海域に位置し、地図にないピトケアン島に上陸暮らし始めた。その後のクリスチャンについては、1793 年暮れごろに紛争によって死んだとされている。ピトケアン島は現在イギリス領であるが、50 名ほどの島民はみなバウンティ号の乗組員と彼らが連れて逃げたタヒチの女性たちとの間の子孫で

ある。Government of the Pitcairn Island HP 参照。

²⁸ 「老水夫の歌」とクリスチャンについては、Houston および CN, I, 174n、特に(22) の箇所を参照のこと。その他、George Whalley, “Review of C. S. Wilkinson, *The Wake of the ‘Bounty’*.”を参照。

²⁹ *Lyrical Ballads* (2013), 323-324 参照。

³⁰ John Beer, “Coleridge, Samuel Taylor.” *Oxford Dictionary of National Biography*, online edition. 参照のこと。

³¹ 1795 年 5 月から 6 月、コールリッジはブリストルの公共図書館からカドワースの *The True Intellectual System of the Universe* (1743 ed.)を借りている。Whalley(1949), 120 参照。1796 年から 1797 年のノートブックには、この著作からの引用があり、注には Coburn による詳細な説明がある。CN, I, 200, 200n, 201, 201n を参照。カドワースは 17 世紀の聖職者でケンブリッジ・プラトニストの一人とされる。コールリッジは“Matter is incorporeal”というギリシャ語と英語でのカドワースのグロスをノートに書きつけたが(CN, I, 201)、それは Atomists の思想が記述されている次の部分にある。“...if all body be made to consists of two substantial principles, whereof one is matter devoid of all form ... from whence these philosophers themselves conclude, that it is incorporeal; the other, form, which being devoid of all matter, must needs be incorporeal likewise.”(Cudworth, 49) カドワースはこのグロスに Plotinus の *Ennead* II, 4, 9 とも付け加えており、それをコールリッジもノートにメモしている。

³² この部分に対応するクック航海誌の記述については、Lowes, 42-43 参照のこと。

³³ 本稿における「老水夫の歌」のテキストは、*PW(R)*による。

³⁴ ヨセフスは魂の不滅について次のように語っている。“The bodies of all men are indeed mortal, and are created out of corruptible matter; but the soul is ever immortal, and is a portion of the Divinity that inhabits our bodies.”(666)

³⁵ コールリッジが 1796 年に出版した詩集、*Poems on Various Subjects* には “Effusion”と冠して番号を振った一連の詩が収録されている。プロティノスの「流出」は *effusion* と訳されることが多く、思想的影響を推測することはできるが、コールリッジ自身が当時 *effusion* という語に託したイメージは、詩の言葉が人々に届き共感が伝搬するといった観念連合に近いものであった。*PW(R)*, 2, 1194-1196 参照。

³⁶ 引用箇所は公式航海誌 (1777)からである。Beaglehole が編集したクック自身の記録は、次のようになっている。“Last night while we were off Penguin Island the Whole sea became all at once illuminated, or what the Seamen calls all on fire, some number of small Globular Insects about the size of a Common Pins head and quite transparrant[sic]; this appearance of the Sea is very common in all parts I have been in, but the cause is not so generally known.”(Cook, ed. Beaglehole, 46) 海が燃えるように見えるのは、ごく小さな球体で透明な発光体の生物が一面に浮かんでいるからと説明されている。

³⁷ *PW(R)* part 1, 371 および *PW(V)* part 1, 506-509 参照。

CL: *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*

CM: Samuel Taylor Coleridge, *Marginalia*

CN: *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*

PW(R): Samuel Taylor Coleridge, *Poetical Works(Reading Text)*

PW(V): Samuel Taylor Coleridge, *Poetical Works(Variorum Text)*

<参考文献>

Barney, Stephen. *Minutes of the Proceedings of the Court-Martial Held at Portsmouth August 12, 1792*. London, 1794.

Beaglehole, “Some Problems of Cook’s Biographer.” *The Mariner’s Mirror*, Vol.55, No. 4 (1969) : 365-381.

Bligh, William. *A Narrative of the Mutiny, on Board His Majesty’s Ship Bounty and the Subsequent Voyage of Part of the Crew, in the Ship’s Boat*. London, 1790.

Coleridge, Samuel Taylor. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. E.L. Griggs. Oxford: Clarendon Press, 1956-71.

---. *Lectures 1818-1819 on the History of Philosophy*. Ed. J. R. De J. Jackson. Princeton: Princeton UP, 2000.

---. *Marginalia*. Eds. H. J. Jackson and George Whalley. 6vols. Princeton: Princeton UP, 1980-2001.

---. *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*. 5vols. Ed. Cathleen Coburn et.al. Princeton: Princeton UP, 1957-1990.

---. *Poetical Works I: Poems (Reading Text)*. 2parts. Ed. J. C. C. Mays. Princeton: Princeton UP, 2001.

---. *Poetical Works II: Poems (Variorum Text)*. 2parts. Ed. J. C. C. Mays. Princeton: Princeton UP, 2001.

---. *Table Talk*. Ed. Carl Woodring. Princeton: Princeton UP, 1990.

Colley, Ann C. *Coleridge and the Geometric Idiom*. Cambridge: Cambridge UP, 2023.

Cook, James. *The Journals of Captain James Cook on his Voyages of Discovery: The Voyage of the Resolution and Adventure 1772-1775*. Ed. J. C. Beaglehole. Cambridge: Cambridge UP, 1961.

---. *A Voyage towards the South Pole, in the Years 1772,1773,1774, and 1775*. London, 1777.

Cudworth, Ralph. *The True Intellectual System of the Universe*. vol.1. London, 1743.

Empson, William. “The Ancient Mariner.” *Critical Quarterly*, Vol.5, Issue 4 (1964) : 298-319.

- . "The Ancient Mariner: an Answer to Warren." ed. John Haffenden. *Kenyon Review*. NS 15(1) (1993): 155-177.
- Empson, William and David Pirie(eds.). *Coleridge's Verse: A Selection*. London: Faber and Faber, 1972.
- European Magazine and London Review*. vol.17. London, 1790.
- Forster, George. *A Voyage round the World, in his Britannic Majesty's Sloop, Resolution, Commanded by Capt. James Cook, during the Years 1772,3,4, and 5*. 2vols. London, 1777.
- Gentleman's and London Magazine, or Monthly Chronologer, for January, 1791*. London, 1791.
- Gentleman's Magazine*. New Series, vol.2. London, 1834.
- Griffin-Short, Rita. "The Ancient Mariner and the Transit of Venus." *Endeavour*, Vol.27, No.4 (2003): 175-179.
- Houston, Neal B. "Fletcher Christian and 'The Rime of the Ancient Mariner.'" *The Dalhousie Review*, 45.4(1966): 431-446.
- Jackson, J. R. de J. (ed.) *Coleridge: The Critical Heritage*. New York: Barnes & Noble, 1970.
- Johnson, R. Brimley (ed.). *Christ's Hospital: Recollections of Lamb, Coleridge, and Leigh Hunt*. London, 1896.
- Josephus, Flavius. *The Works of Flavius Josephus*. Trans. William Whiston. New York: 1855.
- Kabitoğlu, E. Douka. "The Cambridge Platonists: A Reading from Coleridge." *The Seventeenth Century*, 6 (1991): 11-31.
- Kippis, Andrew. *The Life of Captain James Cook*. London, 1788.
- Letters from Mr. Fletcher Christian, containing A Narrative of the Transactions on board His Majesty's Ship Bounty, before and after the Mutiny, with his subsequent Voyages and Travels in South America*. London, 1796.
- Lowes, John Livingston. *The Road to Xanadu: A Study in the Ways of the Imagination*. Forwarded by Thomas McFarland. 1927: Princeton: Princeton University Press, 1986.
- MacGillivray, J. R. "An Early Poem and Letter by Wordsworth." *Review of English Studies*, vol.5, Issue 17(1954), 62-66
- McGann, Jerome. *The Beauty of Inflections: Literary Investigations in Historical Method and Theory*. Oxford: Clarendon Press, 1985.
- McMahon, Mary. "James Cook for Children: Juvenile Literature of the 18th and 19th Centuries."

- Untold lives blog*, British Library. 9 August, 2018. <https://blogs.bl.uk/untoldlives/2018/08/james-cook-for-children-juvenile-literature-of-the-18th-and-19th-centuries.html> 20240107
- Monthly Review*. vol. XXI, New Series. for September to December, 1796. London, 1797.
- Oxford Dictionary of National Biography*. Online edition. <https://www.oxforddnb.com/> 20240128
- Political Magazine and Parliamentary, Naval, Military and Literary Journal*. London, 1790.
- Richards, I. A. *Coleridge on Imagination*. Kegan Paul: London, 1934.
- Shelvocke, Capt. George. *A Voyage round the World*. London, 1726.
- Smith, Bernard. "Coleridge's Ancient Mariner and Cook's Second Voyage." *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*. Vol.19, No. 1/2 (1956) :117-154.
- Stillinger, Jack. *Coleridge and Textual Instability: the Multiple Versions of the Major Poems*. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Turner, Richard. *A New and Easy Introduction to Universal Geography: in a Series of Letters to a Youth at School*. 6th ed. London, 1794.
- Wales, Wendy. *Captain Cook's Computer: the Life of William Wales, F. R. S*. York: Hame House, 2015.
- Warren, Robert Penn. "A Poem of Pure Imagination (Reconsiderations VI)" *The Kenyon Review*, Vol.8, No. 3 (1946) : 391-427.
- Whalley, George. "The Bristol Library Borrowings of Southey and Coleridge, 1793-8." *The Library*, Vol.s5-IV, Issue2 (1949), 114-132.
- . "The Mariner and the Albatross." *University of Toronto Quarterly*, vol 16, No. 4 (1947) : 381-398.
- . "Review of C. S. Wilkinson, The Wake of the 'Bounty.'" *Queen's Quarterly*, 42.2 (1955): 271-4. <http://georgewhalley.ca/gwp/node/6963> 20240204
- Wordsworth, William and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads*. Eds. R. L. Brett and A. R. Jones. London: Routledge, 1963.
- . *Lyrical Ballads 1798 1802*. Ed. Introd. by Filna Stafford. Oxford: Oxford UP, 2013.

<Web 資料>

Government of the Pitcairn Island HP <https://www.government.pn/> 20240127